

### Ⅲ 開業獣医師に対する調査結果の概要

## 1. 診療業務の経営形態について

- 1 個人経営      2 法人経営      3 団体など      4 その他

## 2. 豚以外の主な診療動物について（複数回答）

- 1 乳牛      2 肉牛      3 家禽      4 馬      5 伴侶動物      6 その他

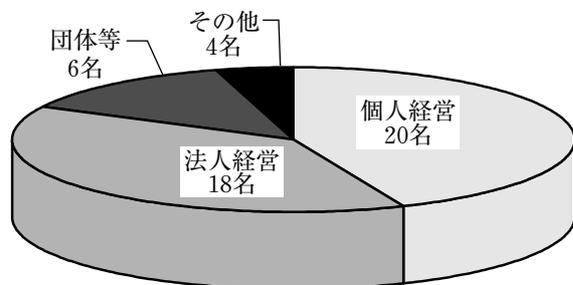


図1 診療業務の経営形態

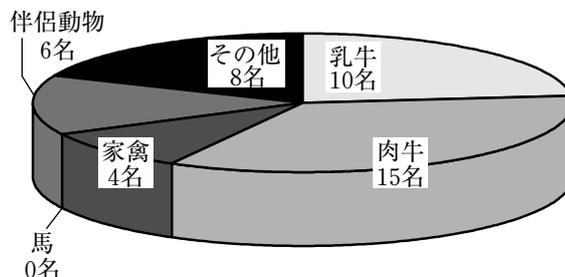


図2 豚以外の診療動物

概要 回答数46名の開業獣医師の経営形態は、「個人経営」が20名（44%）であるのに対し、「法人経営」は18名（39%）で若干少ない傾向でした。また、家畜共済組合などの「団体など」は6名（13%）でした（図1）。豚以外の主な診療動物については、「肉牛」が回答数43名中15名（35%）および「乳牛」が10名（23%）となっており、両方で58%を占めていました。また、犬・猫などの「伴侶動物」の診療を行っている方は6名（14%）、「家禽」は4名（9%）でした（図2）。

## 3. 法人経営の方で、豚の診療業務に従事している獣医師数について

- 1 1人      2 2～3人      3 4人以上

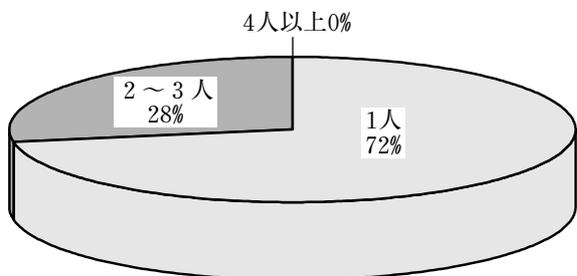


図3 法人経営での豚の診療獣医師数

概要 1 法人経営体当たり豚の診療業務に従事している獣医師数についてみると、「1人」が72%（回答数18中13）および「2～3人」が28%（回答数5）の割合となっており、「4人以上」の法人経営体はありませんでした（図3）。

## 4. 日常の診療活動状況について

## (1) 診療の実施形態について

- 1 経営者との個人間契約      2 経営者団体などの団体契約  
3 個人契約と団体契約の両方      4 自由診療（顧客は固定せず）  
5 その他

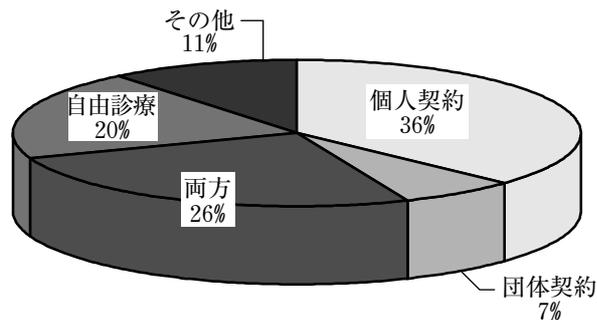


図4-1 診療の実施形態

概要 診療の実施形態は、「経営者との個人契約」による割合がもっとも多くて36%（回答数46中17）で、次いで「経営団体などとの団体契約」は7%（回答数3）、個人契約と団体契約の「両方」が26%（回答数12）、「自由診療」が20%（回答数9）などでした（図4-1）。

(2) 最近1年間に診療した農場数について（法人の場合は1人当たり換算）

1 50農場以上	2 50～40農場	3 40～30農場	4 30～20農場
5 20～10農場	6 10農場未満		

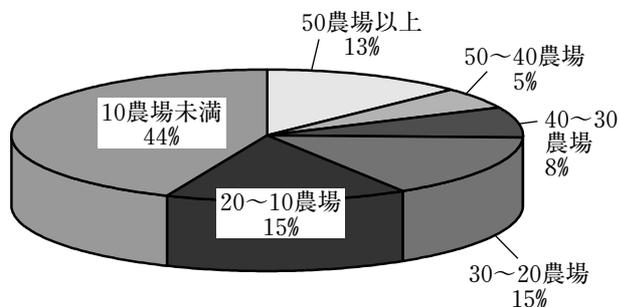


図4-2 最近1年間に診療した農場数

概要 1人当たりの年間診療農場数についてみると、「10農場未満」と回答した割合がもっとも多くて44%（回答数39中17）、次いで「30～20農場」および「20～10農場」が各15%（回答数各6）あり、診療農場数が30農場までの割合は全体の74%を占めています。一方、「50農場以上」との回答が13%（回答数5）ありました（図4-2）。

(3) 1農場当たり年間訪問回数について

1 12回以上	2 12～8回	3 8～4回	4 4回未満
---------	---------	--------	--------

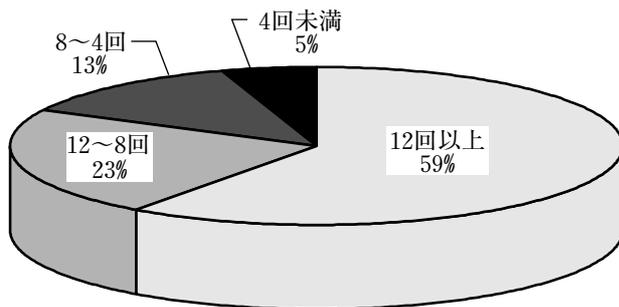
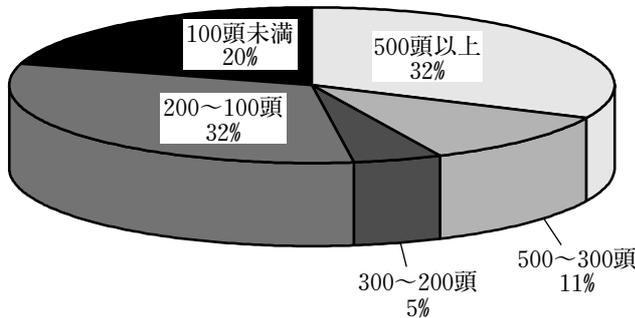


図4-3 1農場当たり年間訪問回数

概要 1農場当たり年間訪問回数は、「12回以上」の割合が59%（回答数40中24）を占めてもっとも多く、次いで「12～8回」が23%（回答数9）、「8～4回」が13%（回答数5）などとなっています（図4-3）。

(4) 診療またはコンサルタントを行っている農場の飼養規模 (稼動母豚数)

- 1 500頭以上    2 500~300頭    3 300~200頭    4 200~100頭    5 100頭未満



概要 訪問農場の飼養規模 (稼動母豚数) についてみると、「500頭以上」および「200~100頭」が各32% (回答数44中14) で、100頭以上規模が80%を占め、「100頭未満」は20% (回答数9) となっています (図4-4)。

図4-4 農場の規模 (稼動母豚数)

5. 日常の診療活動において多く遭遇する疾病について

(1) 母豚における遭遇疾病について (複数回答)

- 1 発情微弱    2 無発情    3 不妊症    4 子宮内膜炎  
 5 乳房炎    6 異常産    7 関節炎・起立不能    8 皮膚炎・膿瘍  
 9 寄生虫病    10 感染症    11 その他

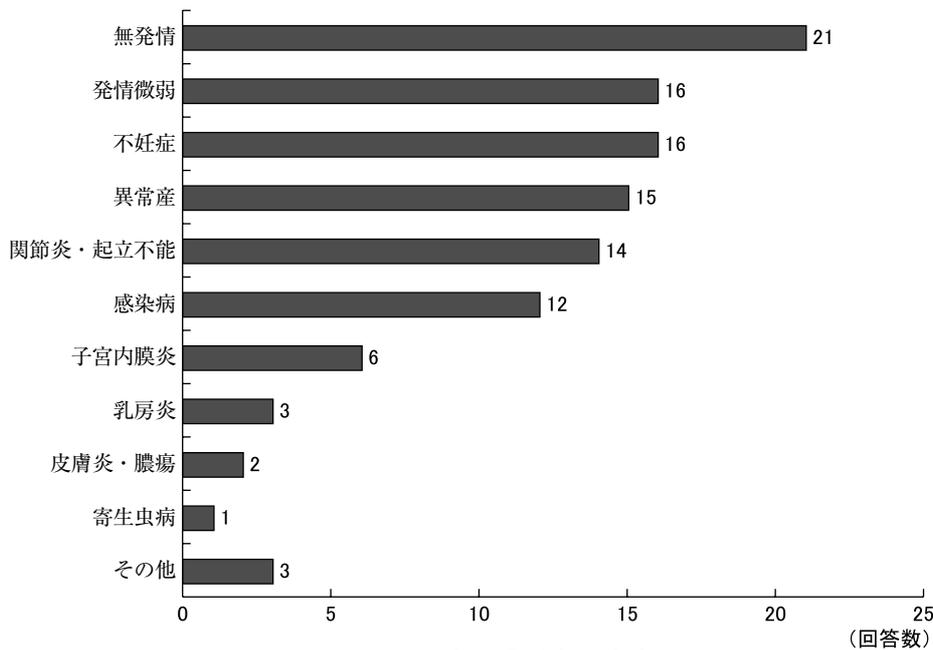


図5-1 母豚で多く遭遇する疾病

概要 母豚の診療に際して多く遭遇する疾病は、「無発情」をはじめ (回答数109中21)、「発情微弱」 (回答数16)、「不妊症」 (回答数16)、「異常産」 (回答数15)、「関節炎・起立不能」 (回答数14)、「感染症」 (回答数12) などの順となっています (図5-1)。

(2) 哺乳豚における多発疾病について (複数回答)

- 1 細菌性下痢    2 ウイルス性下痢    3 細菌性肺炎    4 敗血症  
 5 皮膚病 (スス病など)    6 関節炎・髄膜炎    7 その他

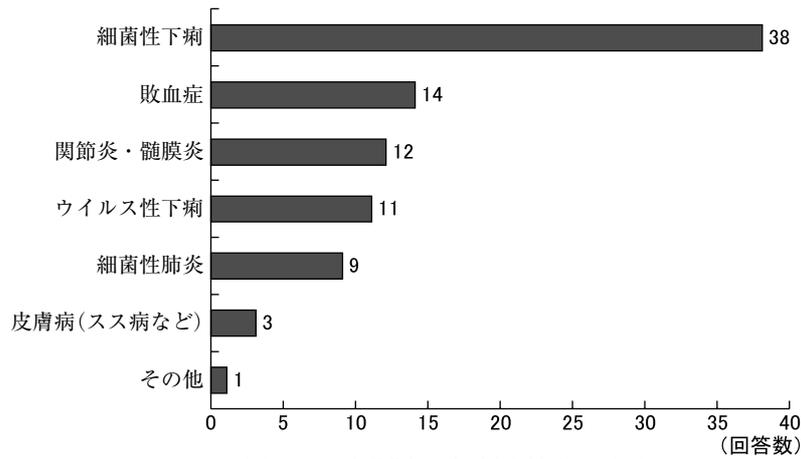


図5-2 哺乳豚で多く遭遇する疾病

概要 哺乳豚の診療で多く遭遇する疾病は、「細菌性下痢」が突出して多く（回答数88中38）、次いで「敗血症」（回答数14）、「関節炎・髄膜炎」（回答数12）、「ウイルス性下痢」（回答数11）、「細菌性肺炎」（回答数9）などとなっています（図5-2）。

(3) 離乳子豚（離乳後4～5週間）における遭遇疾病について（複数回答）

- 1 離乳後下痢（混合感染を含む）    2 細菌性下痢    3 ウイルス性下痢    4 胸膜肺炎
- 5 マイコプラズマ肺炎    6 パスツレラ肺炎    7 肺炎（混合感染）    8 PRRS
- 9 レンサ球菌病（髄膜炎）    10 サルモネラ病    11 皮膚病    12 寄生虫病
- 13 浮腫病    14 その他

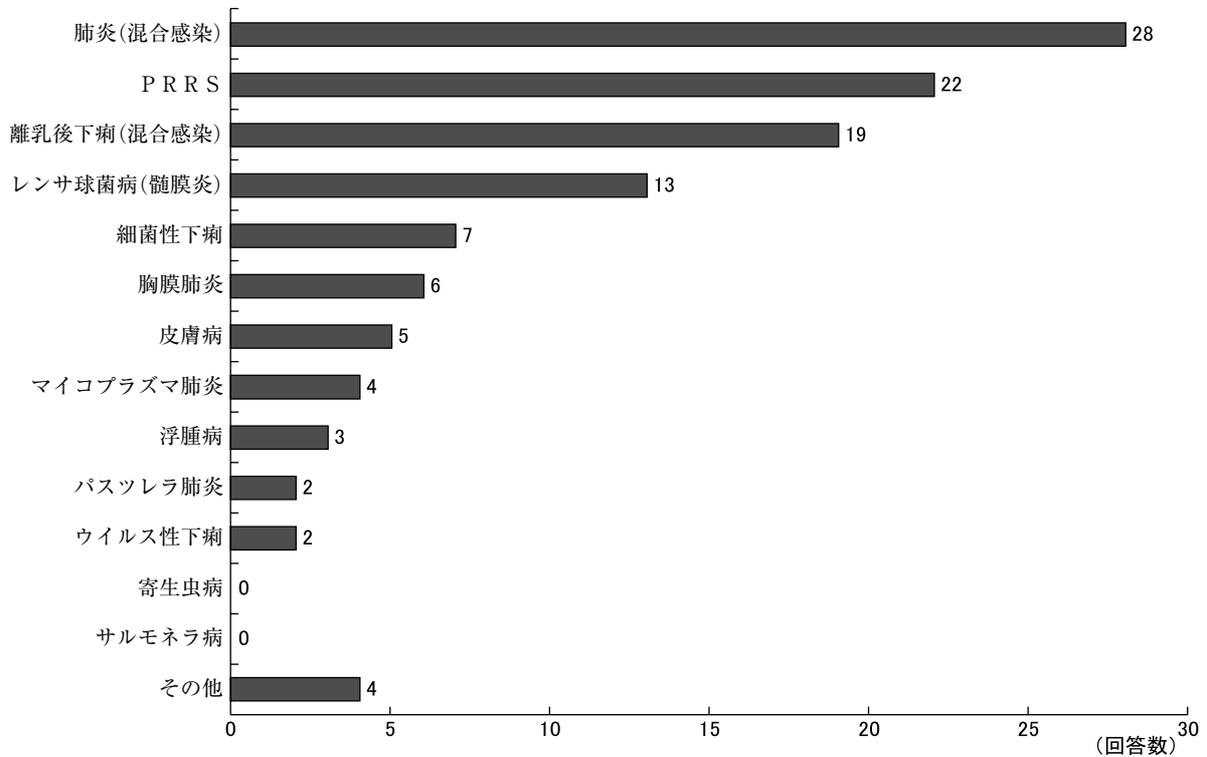


図5-3 離乳子豚(離乳後4～5週間)で発生の多い疾病

概要 離乳子豚で多く遭遇する疾病は、「肺炎（混合感染）」がもっとも多く（回答数115中28）、次いで「PRRS」（回答数22）、離乳後下痢（回答数19）、レンサ球菌性髄膜炎（回答数13）などとなっています（図5-3）。

## (4) 肥育豚における遭遇疾病について (複数回答)

- |             |          |           |          |
|-------------|----------|-----------|----------|
| 1 胸膜肺炎      | 2 PRRS   | 3 パスツレラ肺炎 | 4 豚萎縮性鼻炎 |
| 5 マイコプラズマ肺炎 | 6 サルモネラ病 | 7 増殖性腸炎   | 8 豚丹毒    |
| 9 オーエスキー病   | 10 寄生虫病  | 11 浮腫病    | 12 その他   |

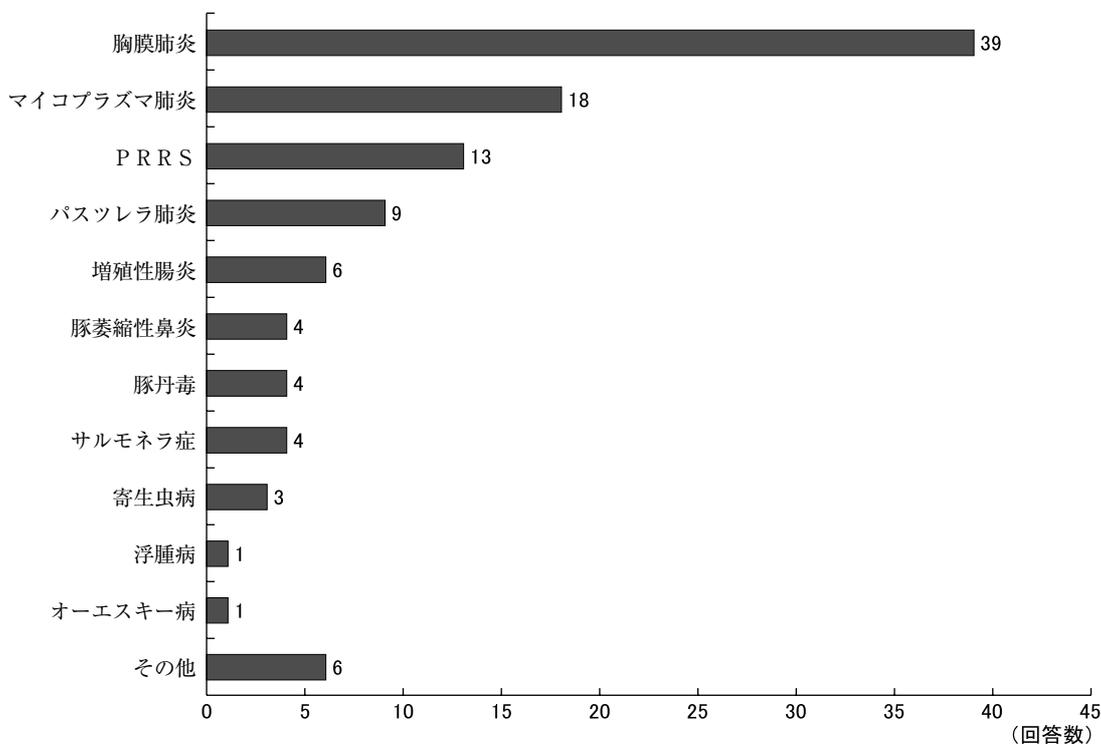


図5-4 肥育豚の疾病で多く遭遇する疾病

概要 肥育豚で多く遭遇する疾病は、「胸膜肺炎」とする回答が突出して多く (回答数108中39)、次いで「マイコプラズマ肺炎」 (回答数18)、「PRRS」 (回答数13) などとなっています (図5-4)。

## 6. 診療に際して使用する動物用医薬品について

## (1) 第一次選択剤として使用頻度の高い抗菌剤について (複数回答)

- 1 ペニシリン系 (ペニシリン、アンピシリン、メシリナムなど)
- 2 セフェム系 (セフトオルなど)
- 3 アミノ配糖体系 (カナマイシン、ストレプトマイシンなど)
- 4 マクロライド系 (スピラマイシン、タイロシンなど)
- 5 テトラサイクリン系 (オキシテトラサイクリンなど)
- 6 その他の抗生物質 (コリスチン、リンコマイシン、チアムリンなど)
- 7 抗生物質配合剤 (ペニシリン・ストレプトマイシン合剤など)
- 8 サルファ剤 (スルファジメトキシシ、スルファモノメトキシシなど)
- 9 キノロン系合成剤 (オキシソリン酸、エンロフロキサシンなど)
- 10 その他の抗菌剤 (チアンフェニコール、カルバドックスなど)

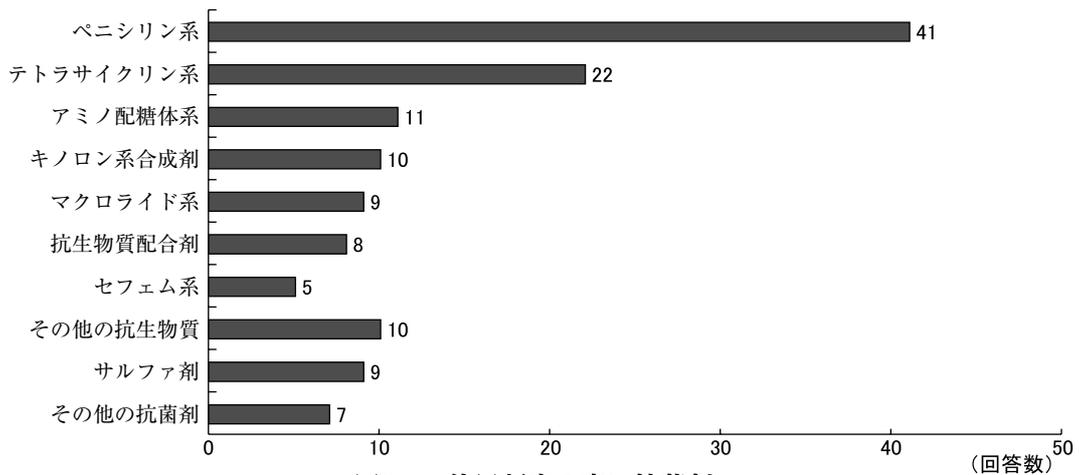


図6-1 使用頻度の高い抗菌剤

概要 第一次選択剤として使用する抗菌剤は、「ペニシリン系抗生物質」の回答数をもっとも多く（回答数132中41）、次いで「テトラサイクリン系抗生物質」（回答数22）、「アミノ配糖体系」（回答数11）、「キノロン系合成剤」（回答数10）などとなっています（図6-1）。

(2) 肥育豚へ応用する抗菌剤の投与経路について（多い順に□内に記入）

□ 筋肉注射 □ 飲水投与 □ 飼料添加 □ その他

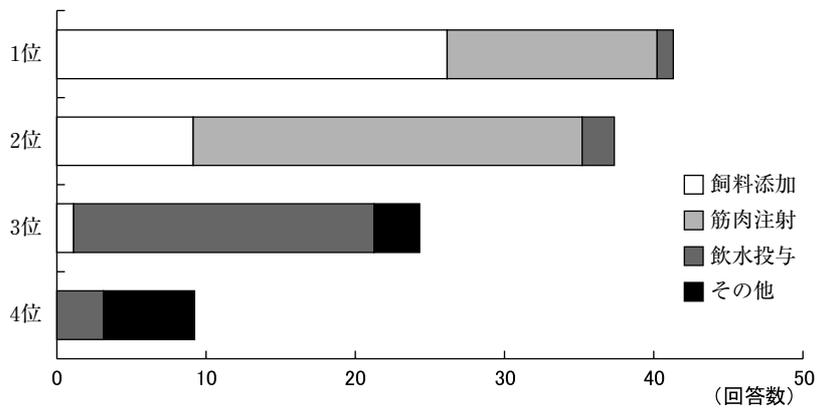


図6-2 抗菌剤の投与経路

概要 肥育豚における抗菌剤の投与経路は、「飼料添加」による場合がもっとも多く（1位の回答数41中26）、次いで「筋肉注射」（回答数14）となっており、「飲水投与」（回答数1）による経口投与は限られています（図6-2）。

(3) 診療に際して使用頻度の高いワクチンについて (複数回答)

- |                              |                |                   |
|------------------------------|----------------|-------------------|
| 1 ARワクチン                     | 2 豚丹毒ワクチン      | 3 豚大腸菌性下痢ワクチン     |
| 4 豚胸膜肺炎病ワクチン                 | 5 日本脳炎ワクチン     | 6 豚オーエスキー病ワクチン    |
| 7 豚パルボウイルス病ワクチン              | 8 豚インフルエンザワクチン |                   |
| 9 豚伝染性胃腸炎ワクチン                | 10 グレーサー病ワクチン  | 11 豚マイコプラズマ肺炎ワクチン |
| 12 PRRSワクチン                  | 13 豚流行性下痢ワクチン  |                   |
| 14 日本脳炎・豚パルボウイルス病2種混合ワクチン    |                |                   |
| 15 日本脳炎・豚パルボ・ゲタウイルス病3種混合ワクチン | 16 その他         |                   |

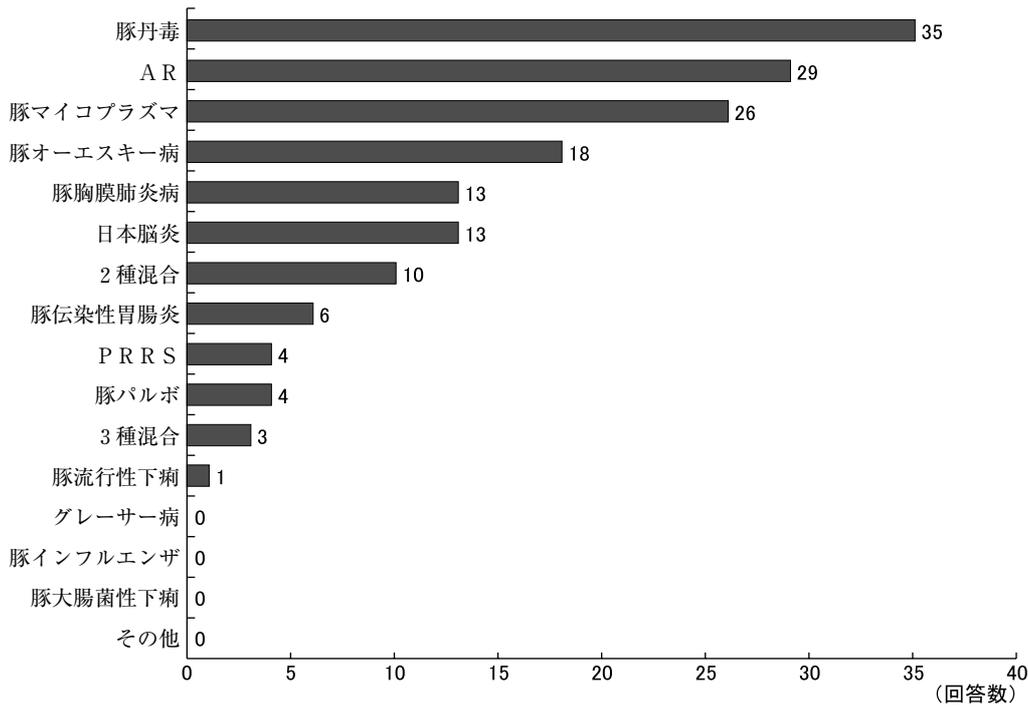


図6-3 使用頻度の高いワクチン

概要 使用頻度の高いワクチンは、「豚丹毒」(回答数162中35)、「AR」(回答数29)、「豚マイコプラズマ肺炎」(回答数26)のワクチンであり、次いで「豚オーエスキー病」(回答数18)、「豚胸膜肺炎」(回答数13)、「日本脳炎」(回答数13)、「日本脳炎・豚パルボウイルス病2種混合」(回答数10)なども比較的多く使用されています(図6-3)。

(4) 駆虫薬の使用頻度について

- |          |           |             |
|----------|-----------|-------------|
| 1 よく使用する | 2 たまに使用する | 3 ほとんど使用しない |
|----------|-----------|-------------|

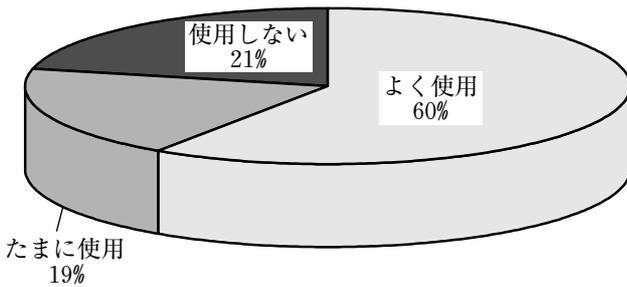
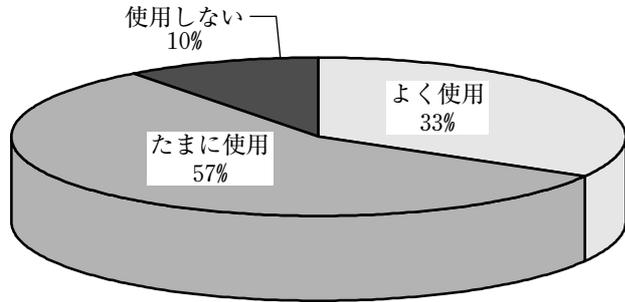


図6-4 駆虫薬の使用頻度

概要 駆虫薬の使用頻度は、「よく使用する」との回答割合が60%(回答数42中25)と多く、次いで「ほとんど使用しない」が21%(回答数9)および「たまに使用」が19%(回答数8)などとなっています(図6-4)。

(5) ホルモン剤の使用頻度について

- 1 よく使用する      2 たまに使用する      3 ほとんど使用しない



概要 ホルモン剤の使用頻度では、「たまに使用する」(57%; 回答数39中22) および「よく使用する」(33%; 回答数13) 回答割合が多く、「ほとんど使用しない」は10% (回答数13) でした(図6-5)。

図6-5 ホルモンの使用頻度

7. 養豚関係情報の入手方法について

(1) 一般情報(飼養動向、施設・資材、新製品、新技術、流通・金融動向など)の主な入手先について(複数回答)

- 1 農業改良普及センターなど指導機関      2 公立畜産試験場など研究機関      3 農協  
 4 薬品・飼料メーカー      5 顧客(養豚経営者)      6 同業者(開業獣医師)  
 7 各種研修会・研究会      8 専門情報誌紙      9 インターネット      10 その他

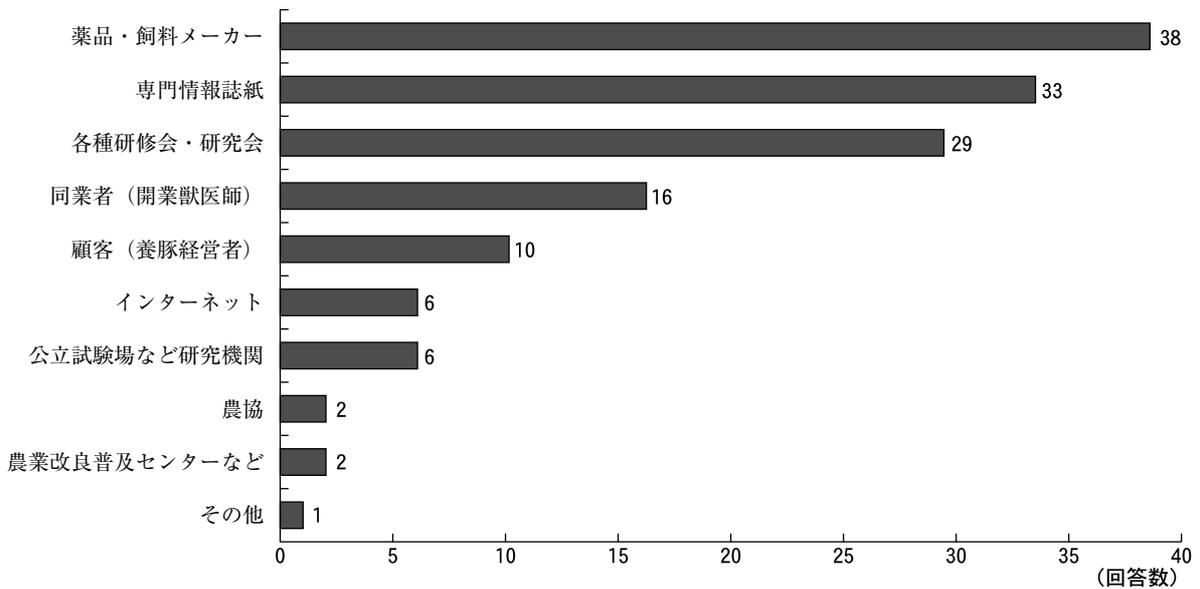


図7-1 一般情報の入手先

概要 一般情報についての入手先についてみると、「薬品・飼料メーカー」(回答数143中38)、「専門情報誌紙」(回答数33)、「各種研修会・研究会」(回答数29) からが多く、次いで「同業者(獣医師)」(回答数16)、「顧客(養豚経営者)」(回答数10) も比較的多い結果となっています(図7-1)。

(2) 衛生情報（伝染病の発生、病性鑑定成績、ワクチン接種・免疫状況など）の主な入手先について（複数回答）

- |             |              |             |
|-------------|--------------|-------------|
| 1 家畜保健衛生所   | 2 食肉衛生検査所    | 3 家畜共済団体    |
| 4 民間衛生検査機関  | 5 農協         | 6 薬品・飼料メーカー |
| 7 顧客（養豚経営者） | 8 同業者（開業獣医師） | 9 各種研修会・研究会 |
| 10 専門情報誌紙   | 11 インターネット   | 12 その他      |

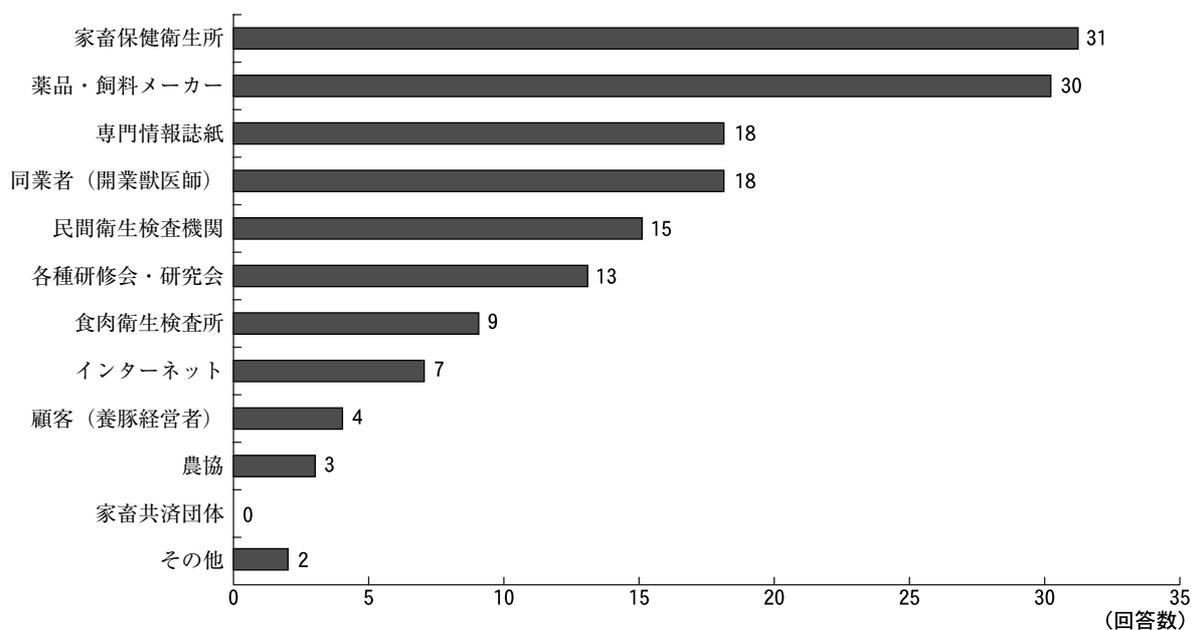


図7-2 衛生情報の入手先

概要 衛生情報の入手先は、「家畜保健衛生所」（回答数150中31）および「薬品・飼料メーカー」（回答数30）からが多く、次いで「専門情報誌紙」（回答数18）、「同業者（獣医師）」（回答数18）、「民間衛生検査機関」（回答数15）、「各種研修会・研究会」（回答数13）などとなっています（図7-2）。

(3) 獣医療関連情報（診断・予防・治療の新技术、薬品の評価や新製品など）の主な入手先について（複数回答）

- |              |             |             |
|--------------|-------------|-------------|
| 1 家畜保健衛生所    | 2 民間衛生検査機関  | 3 薬品・飼料メーカー |
| 4 同業者（開業獣医師） | 5 各種研修会・研究会 | 6 専門情報誌紙    |
| 7 インターネット    | 8 その他       |             |

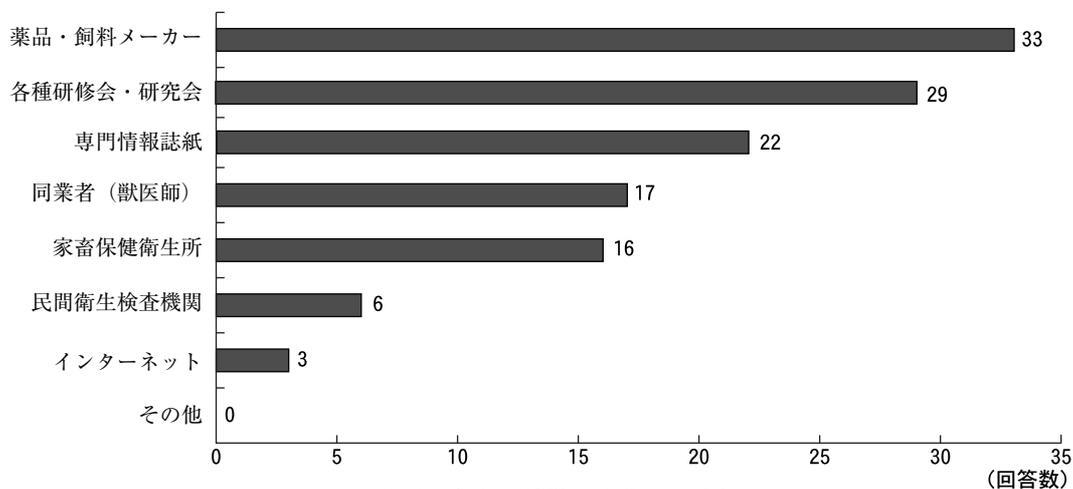


図7-3 獣医療関連情報の入手先

概要 獣医療関連情報の入手先は、「薬品・飼料メーカー」（回答数126中33）、「各種研修会・研究会」（回答数29）、「専門情報誌紙」（回答数22）が多く、次いで「同業者（獣医師）」（回答数17）、「家畜保健衛生所」（回答数16）などとなっています（図7-3）。

8. 診療活動において、顧客（養豚経営者）に対して提供することの多い衛生情報の内容について（複数回答）
- 1 国内外の伝染病の発生、病性鑑定の実施状況など
  - 2 診断・予防・治療の新技術、ワクチネーション・投薬プログラムなど
  - 3 医薬品、ワクチン、医療器具などの新製品
  - 4 と畜場における食肉衛生検査情報のフィードバック
  - 5 疾病対策に有効な管理技術（早期離乳、隔離、SPF方式など）
  - 6 畜産環境制御、ふん尿処理、リサイクル畜産など最新技術
  - 7 豚肉の安全性確保、農場段階におけるHACCP方式など
  - 8 国内外の最新の機材・施設、飼養管理技術の開発状況など
  - 9 生産性向上・低コスト生産、生産技術指標、経営管理など
  - 10 生産物・生産資材の価格動向、流通・消費動向など
  - 11 行政・団体の動向、地域の業界動向、関係統計データなど
  - 12 海外の関連動向（飼養状況、飼料穀物市況など）、他畜産業界の動向
  - 13 その他

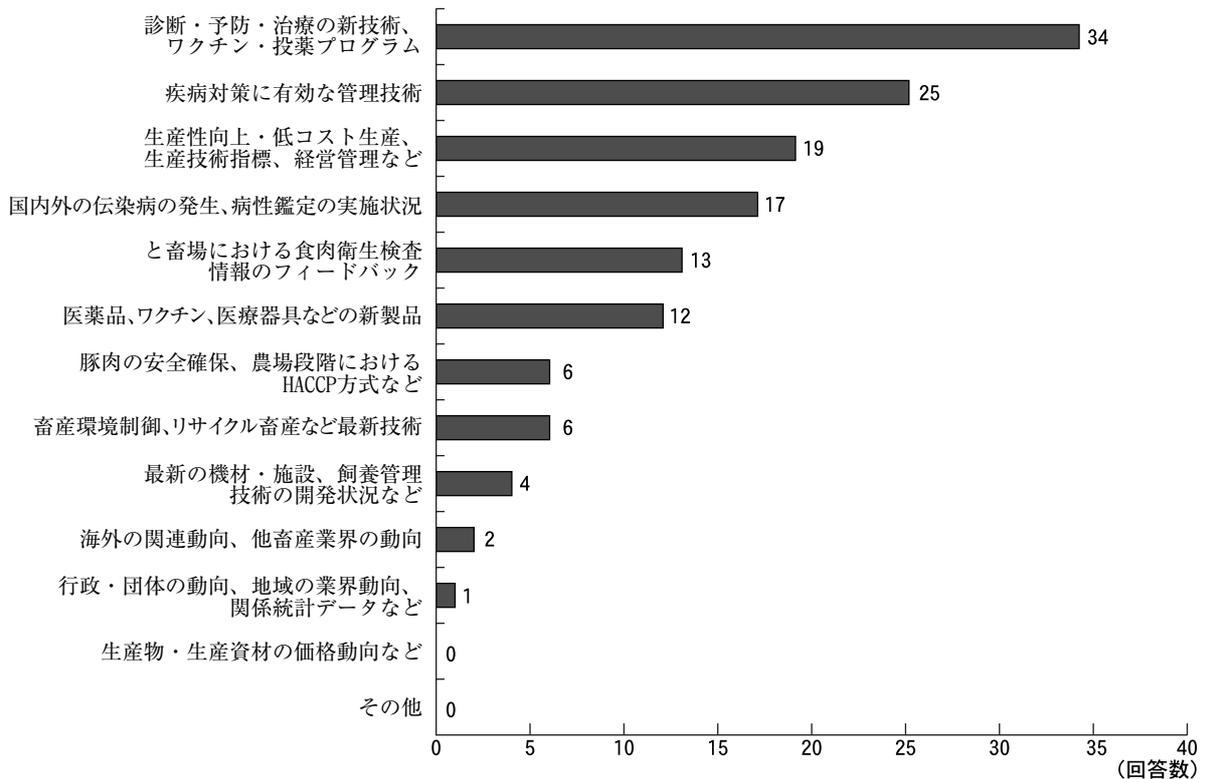


図8 提供する衛生情報

概要 顧客に提供することの多い衛生情報は、「診断・予防・治療の新技術、ワクチネーション・投薬プログラム」（回答数139中34）が多く、次いで「疾病対策に有効な管理技術」（回答数25）、「生産性向上・低コスト生産、生産技術指標、経営管理」（回答数19）、さらに「国内外の伝染病の発生、病性鑑定の実施状況」（回答数17）などの順となっています（図8）。

## 9. 日常の診療業務で重点的に取り組んでいる項目について（複数回答）

- 1 臨床病理検査の充実による診断の迅速化・精度の向上
- 2 検査成績に基づく投薬・ワクチン接種プログラムの設計
- 3 診断結果と治療・予防方針の経営者への説明強化
- 4 診療の「費用対効果」の経済的評価
- 5 畜産環境問題への対応（尿処理施設の稼動状況など）
- 6 施設、管理、生産ベンチマーク、衛生などの総合評価
- 7 農場段階における豚肉の安全性確保の指導強化
- 8 顧客農場プロファイルの充実（パソコンによる管理）
- 9 経営指導、従業員教育、情報提供などの充実
- 10 その他

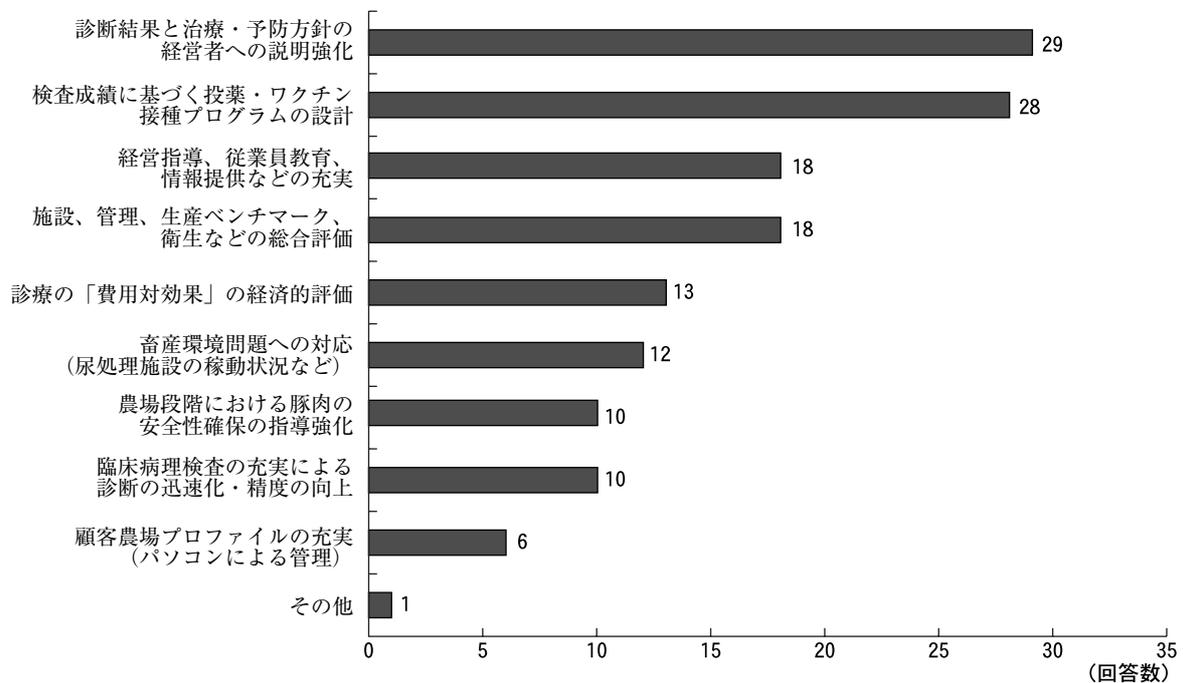


図9 診療業務の重点的取組み項目

概要 診療業務の重点的取組み項目についてみると、「診断結果と治療・予防方針の説明強化」（回答数145中29）および「検査成績に基づく投薬・ワクチン接種プログラム」（回答数28）を挙げる回答が多く、次いで多い項目は「経営指導、情報提供などの充実」（回答数18）および「施設、管理などの総合評価」（回答数18）でした（図9）。

## 10. 飼養戸数の減少、経営規模の拡大などの変化に対応した今後の診療方針について（複数回答）

- 1 診断サービスの定期化と予防衛生の強化
- 2 臨床獣医師間のネットワーク化による診断業務の効率化
- 3 食肉の安全性確保のためのモニタリング機能の強化
- 4 経営、生産、畜産環境なども含めた総合コンサルタント機能の発揮
- 5 疾病発生などによる危機管理の体制整備
- 6 従来どおりでよい
- 7 その他

表1 今後の診療方針

診療方針	回答数
経営、生産、畜産環境なども含めた総合コンサルタント機能の発揮	31
診断サービスの定期化と予防衛生の強化	20
疾病発生などによる危機管理の体制整備	12
臨床獣医師間のネットワーク化による診断業務の効率化	10
食肉の安全性確保のためのモニタリング機能の強化	6
従来どおりでよい	0
その他	5

概要 今後の診療方針は、「総合コンサルタント機能の発揮」と回答した数をもっとも多く（回答数84中31）、次いで「診断サービスの定期化と予防衛生の強化」（回答数20）、「疾病発生などによる危機管理体制整備」（回答数12）、「獣医師間ネットワークによる診断業務の効率化」（回答数10）、「食肉の安全性確保のためのモニタリング機能の強化」（回答数6）などとなっています（表1）。

11. 診療・コンサルタントに対する診療報酬などについて

- (1) 診療報酬のうち、豚の診療報酬の占める割合はどれ位ですか
- 1 40%未満      2 40～60%      3 60～80%      4 80%以上
- (2) 現在の報酬水準についてどう思いますか
- 1 低い      2 適当      3 高い

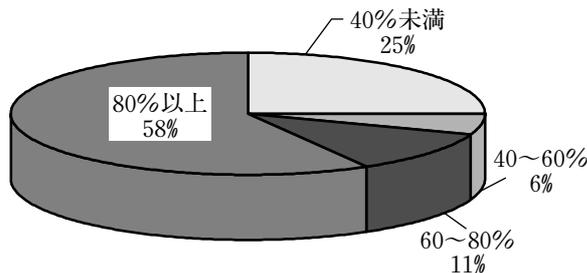


図11-1 診療報酬の占める割合

概要 診療報酬のうち豚の診療報酬が占める割合は、「80%以上」とする回答数をもっとも多く58%（回答数36中21）、次いで「40%未満」が25%（回答数9）、「60～80%」が11%（回答数4）、「40～60%」が6%（回答数2）などでした（図11-1）。

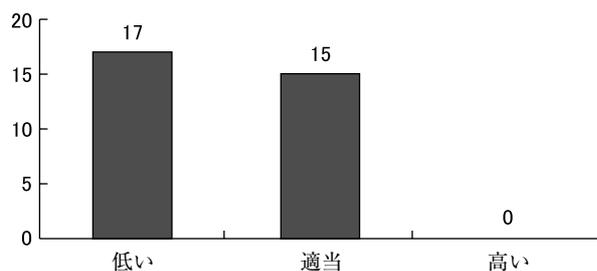


図11-2 現在の報酬水準

概要 報酬水準については、「低い」と回答した方は回答数32名中17名で、「適当」との回答は15名でした（図11-2）。

- (3) 1カ月1回の農場訪問として、「母豚1頭当たり月額診療費」はどれ位の水準が妥当と思いますか（交通・宿泊代は別）

概要 母豚1頭当たりの月額診療費としてもっとも多かった希望額は「200円」内外で、回答数26名中8名（31%）で、「100円から500円」の範囲の方が23名（88%）でした。また、「500円以上」を考えている方は3名（12%）でした。

## 12. 「自由記述欄」に記載された意見の概要

22名の方の記載がありました。以下はその概要です。

- ・ 獣医師としても経営者の視点が必要
  - ・ 従来の個体診療からHACCPも含めたコンサルタント的な（プロダクションメディスン）仕事の重要性が増大
  - ・ 顧客から豚疾病の専門的な知識と養豚経営に関するグローバルな見解の2面性を求められるので、情報収集が必須
  - ・ 治療のみでなく予防を考え、飼養方法の改善や投薬プログラムの見直しを実施したい
  - ・ 食肉生産過程における一切の抗菌剤の使用を禁止し、ワクチンによる予防衛生に重点を移すことが必要
  - ・ 大規模化に伴い、養豚技術に精通した人材育成が必要
  - ・ 豚専門獣医師を育てるには農場との診療契約のみでなく、HACCPモニタリングなどの定期的な収入が確保できる新規業務の展開も必要
- 
- ・ 予防衛生の今後の対応や慢性疾病に関する情報交換を希望
  - ・ 豚丹毒、オーエスキー病、PRRS、マイコプラズマ肺炎などの防除対策についての情報交換を希望
  - ・ 家畜保健衛生所の病性鑑定能力を増強して、365日対応可能な体制にしてほしい
  - ・ 豚コレラ、オーエスキー病清浄化における国のリーダーシップに期待
  - ・ 豚の診療が個体治療から集団予防へと変化していることを実感
  - ・ 地方の小規模農家では予防・治療、飼養管理指導、ふん尿処理指導など難問が山積
  - ・ 口蹄疫やBSEの発生のように、養豚農家は豚コレラについても不安を感じていることを実感
  - ・ 豚丹毒や寄生虫病が増加
  - ・ 検査機関に属しているため、感染症の病性鑑定や衛生状況の把握に関する検査が多く、臨床現場にでかけることは比較的少ない
  - ・ ワクチン接種と各種検査、死亡豚の剖検などによる重大疾病の予防業務が主体
  - ・ 農家自身による自家治療が多いため、診療の大部分は予防注射になっている
  - ・ 豚コレラワクチン接種中止により豚診療の割合が減少
  - ・ 豚コレラワクチン接種中止により豚専門獣医師の必要性が低下
- 
- ・ 研究会として養豚衛生あるいは疾病に対する統一見解の設定を検討してはどうか
  - ・ 診療費と農場の飼養規模とは関連性高いことに注意すべき
  - ・ 開業獣医師への設問のみでなく、雇用および被雇用獣医師に向けた設問なども入れて設問の幅を広げてほしい
  - ・ ワクチン接種業務のみのため、回答できない項目が多かった